

1. 週の初めの日の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って墓に着いた。見ると、石が墓からわきまがしてあった。はいて見ると、主イエスのからだはなかった。(24:1-3)
 - a. イエスが墓に葬られている間の弟子たちの状態を想像してみよう。肉体的には気分が悪く疲労困憊で無感覚、精神的には幻滅、混乱し、感情的には意気消沈し、怒り、悲しみ、不安に満ち、霊的には空っぽであったのではないか。
 - b. かと言ってこのような状態の弟子たちを非難できる人はいないと思う。イエスは念入りに弟子たちをこの日のために備えさせていたにもかかわらず、実際には彼らには何の準備もできていなかった。彼らのレベルはそこにとどまっていたのである。
 - c. 「夜明け前が一番暗い」という格言があるように、事態が良くなって来る直前に最悪のことが起きるといことがよくある。あなたも暗やみのどん底にいるように感じる時、決して一人ぼっちではない、必ず夜明けが来る、ということを出してほしい。

2. そのため女たちが途方にくれていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着たふたりの人が、女たちの近くにきた。恐ろしくなって、地面に顔を伏せていると、その人たちはこう言った。「あなたがたは、なぜ生きている方を死人のなかで捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならぬ、と言われたでしょう。」 (24:4-7)
 - a. 空になった墓はよみがえられた救い主を物語っている。この復活は単なる霊的、空想的、隠喩的、象徴的出来事ではなく、文字通り現実起こったことである。神はイエスのからだを死からよみがえらせたが、これは実際の肉体が復活の体に変えられたのだと私は信じている。毛虫が蝶になったり種が木になるように、イエスの地上での体が復活の体へ変わったのである。
 - b. イエスにすべてをゆだねると、私たちもいずれは復活の体を持つようになる。そしてこの世のものでない体をもってこの世にはない神の御国でお仕えする。このような視点から見ると、死からのよみがえりも同じくこの世のものではない。
 - c. 私たちは今は罪によって汚染された世界に生きているが、いつの日か罪はなくなる。 . . . 私たちの体からも、世界からも。

3. 女たちはイエスのみことばを思い出した。そして、墓から戻って、十一弟子とそのほかの人たち全部に、一部始終を報告した。この女たちは、マグダラのマリヤとヨハンナとヤコブの母マリヤとであった。彼女たちといっしょにいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。ところが使徒たちにはこの話はたわごとと思われたので、彼らは女たちを信用しなかった。(24:8-11)
 - a. 残念ながらこの世に生きている限り、私たちの体はこの世の肉体である。しかし私たちの霊と望みはこの世のものではない。イエスが十字架で成してくださったわざ、そして復活によって私たちの将来はこの世にとどまらず、天のものになると約束されている。
 - b. 弟子たちや最初の証人たちがイエスのみことばを思い出したように、私たちもイエスのみことばをとどめておけばもっと人生の意味を見出すことができる。
 - c. イエスのみことばを覚えているなら、これらの証が単なるたわごとなのか、それとも人生をかけて信じる価値のあるものかがわかるであろう。